

令和七年 高尾山中興開山六百五十年

高尾山報

令和6年9月号

元気良く滝に打たれ心身を鍛える

高尾山子供やまぐし修行体験会



飯縄山の山頂へ登拝を行った一行



夕暮れ時に柴燈大護摩供が厳修された

第五十七回飯縄火まつり

八月十日(土) 於 信州飯縄山麓

古来より飯縄権現を御神体と崇める信州飯縄山中腹に位置する大座法師池の畔を会場として「第五十七回飯縄火まつり」が開催され、佐藤貫首大祇師のもと柴燈大護摩供が厳修されました。

大護摩供に先がけて当日の早朝、佐藤貫首を峯中大先達として高尾山先達衆に加えて高尾山修験道秀峰会々員を含む一行は、飯縄山々頂奥宮を目指し入峰修行を行い、盛夏の霊山に法螺貝の音と六根清浄の掛け念仏の音が響き渡りました。

奥宮で法衆が捧げられた後、御燈明をカンテラに灯し山麓の道場まで運ばれました。宵闇迫る頃、奥宮から運ばれた御燈明が篝火に燈されると幻想的な空間が道場内に荘厳され、山伏により点火された柴燈護摩の火炎に向けて世界平和、国土安穩、被災地復興の祈りが捧げられました。

お大師さまはこの親子を救おうと合掌しました。すると突然、目の前の岩屋が崩れ始め、ぼつかり

と洞窟が現れたのです。岩屋の中で親子は身体を温めました。すると母の病もたちまちに癒えて、難を逃れることができたということです。

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城 (147)

三五夜中の
新月の色
二千里の外
故人の心

『和漢朗詠集』白居易(八月十五夜。東の空から輝き出た月影を眺めながら、二千里の彼方に住んでいる親友の心を思いやるよ)

二十四節気の「白露」(九月七日)を過ぎて、幾分か暑さも和らいできたようです。秋の虫たちも元気に鳴き始めて、涼やかな風を肌を感じるようになってきました。

この漢詩に見える「三五夜」とは、数字の三×五の夜ということ。「十五夜」を意味します。陰曆八月十五日の「十五夜」は「中秋の名月」と呼ばれ、一年で最も美しく趣深い月として愛でられてきました(今年も九

月十七日)。月には里芋や梨などの旬のものや、月に見立てたお団子をお供えして、ススキなどの「秋の七草」も飾ります。「お月見」は古く中国から伝わった「収穫に感謝する行事」でもあります。

唐の詩人白居易(七七二(八四六)は、夜空に丸く輝く月を眺めながら、遠く離れて暮らす親友の姿を思い浮かべています。十五夜の特別な光は、心を寄せる二人の距離を縮めてくれる存在でもあるのでしよう。

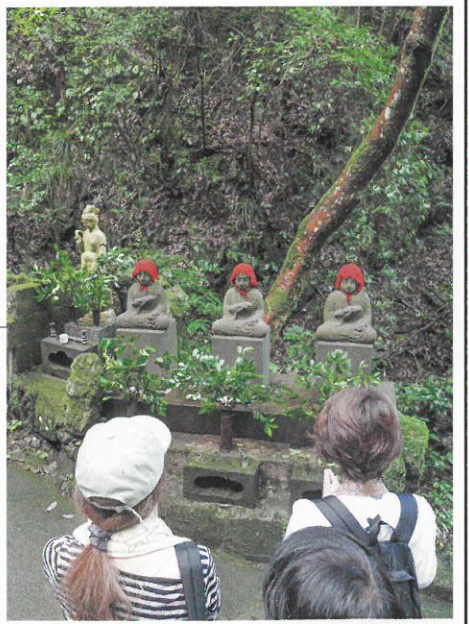
十五夜を過ぎれば、すぐに秋のお彼岸が巡ってきます。二十二日の秋分の日を中心(彼岸の中日)とした前後三日間、十九日から二十五日まで七日間にわたる彼の国の

彼の岸をのみ
教へ置き
月の御舟も
西に行くなり

『三条西実隆「雪玉集」(河の向こう岸に悟りの世界があるということだけを教え残して、月の御舟も西へと進んでいくよ)

「彼の岸」とは「彼岸」という仏教語を訓読した言葉で、「彼の国」と同様に、遙か西の彼方にあると説かれる西方極楽浄土を表しています。この歌では満月を過ぎて少しづつ欠けていく月の姿を舟に見立てているのでしようか。お彼岸の夜空の海を、西を指して漕ぎ渡っているようにです。

お彼岸の期間は、太陽がほぼ真東から昇って真西に沈むことから、私たちが住むこの世(此岸)と仏さまが住まわれているあの世(彼岸)とが一直線に結ばれて近くなる日と言われます。沈み行く夕日を見つめながら極楽浄土を願う「日想観」と呼ばれる修行法も



高尾山内八十八大師の大師像

ありますが、思えば月も太陽と同じように東から西へと進んでいきます。門渡る月の御舟に亡き人への想いを乗せたなら、いつもは遠く感じていた心の距離も近づいてくるのでしよう。

さて先月号では、高尾山薬王院に響え立つ「飯盛杉」(別名「箸立杉」)について書きました。引き続き今月号も、高尾山に残る弘法大師空海(七四〇八三五)伝承について書いてみたいと思います。

明治時代の終わり頃、錦秋の高尾山を訪れた北村雪子さんという方の紀

行文「高尾山紅葉狩の記」(『女学講義』二五巻、明治三十八年(一九〇五)一二月)には、「こゝには岩屋大師とて、一つの御堂あり、この山には所々に石像の大師ありて、皆鉄の柵をめぐらしてあり、八十八ヶ所などいふ紙札の張りあるを見れば、八十八ヶ所あるにやあらん」と書き留められています。ここに見える八十八箇所大師像とは、今も高尾山内にある「高尾山内八十八大師」と思われます。明治三十六年(一九〇三)に高尾山薬王院第二十六世御山主志賀照林大僧正(一

強い日差しを感じる夏の盛りの中、およそ四十名のお子様の参加を頂いて、高尾山子供やまぶし修行体験会が開催されました。

山麓不動産で保護者に見送られ、先達の山伏と共に琵琶滝水行道場を目指して出立。水行では滝に打たれながら、山伏から問いかけられた御本尊様とお約束として「お友達と仲良く出来ますか？」等の質問を受け、「元気よく、「はい！」と答えておりました。

滝行後には緊張もほぐれたのか、子供達は仲良く会話するようになり、険しい山道を元気よく登っていきました。薬王院に到着後は大本坊にて精進カレーライスの昼食を頂きました。

昼食後は腕輪念珠製作。出来上がった念珠は大きさや色使いが様々で、オリジナルの腕輪念珠となりました。その後大本堂にて、当山貫首導師のもと厳修された御護摩修行で、腕輪念珠がお加持されました。

不動院で行われた閉会式では、参加者一同で御本尊・飯縄大権現様へ、本日の修行の成果を今後の生活に活かすことを約束する「誓いの言葉」を奉告。最後には、保護者の見守る中、修行を終えた証となる、「修了証」が授けられ、修行会を通じて仲良くなった友人と別れを惜しみながら帰宅しました。

高尾山子供やまぶし修行体験会

八月四日(日)



佐藤貫首と記念撮影



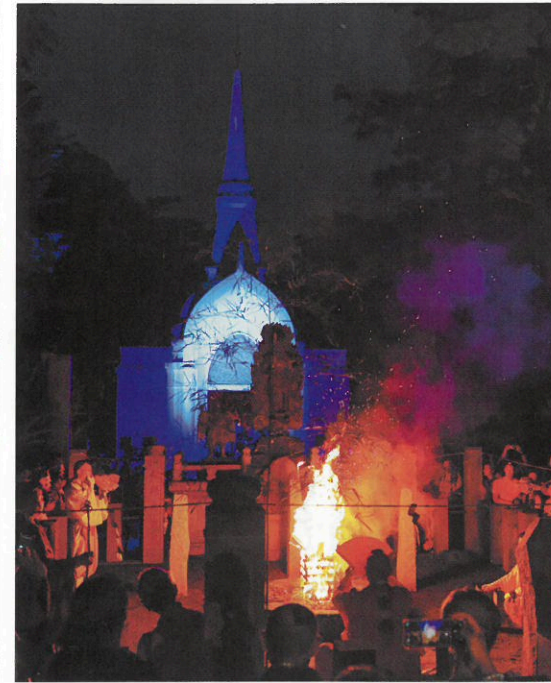
自分だけの腕輪念珠を作成中



元気良く険しい山道を登り、薬王院まで練行する



人々の願いが世界を照らす 夏の高尾山「灯りの巡礼」 清涼体感めぐり



青く輝く仏舎利塔を臨み、世の平穏を願い柴燈大護摩供が厳修された

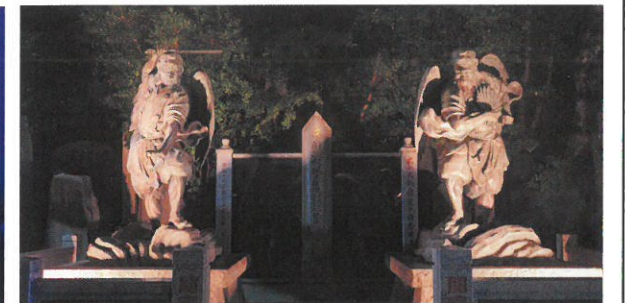
日本の文化と自然を満喫する『夏の高尾山 清涼体感めぐり』が、七月二十日から八月三十一日まで開催されました。八月二十四日には「灯りの巡礼」が行われ、佐藤貫首導師のもと仏舎利塔法楽並びに柴燈大護摩供が厳修されました。世界平和や災害被災地復興、並びに御信徒の皆様の上安全、身体健全など諸願成就をご祈念申し上げます。

世の平穏を願い希望の光を届けるため「ブルーライトアップ」により仏舎利塔は青く輝き、その周囲には御信徒様から御奉納頂きました、諸願成就の願いが込められた数多の紙燈籠の光が暗闇を照らし、大勢の参列者は灯りを見つめ祈りを捧げておりました。

八月十七日から二十五日まで行われた「高尾山 夏のライトアップ」では、参道の春日燈籠に明りが灯り、天狗像や仁王門、大本堂等がライトアップされると、普段目にする薬王院の光景とは異なる幻想的な姿に参拝の皆様は見入っておりました。期間中は同様にライトアップされた天狗像の前で、訪れた参拝者の方々に辻説法が行われました。



暗闇を照らす紙燈籠に祈りを捧げる



ライトアップされた天狗像や大本堂

観音菩薩の宗教

81

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

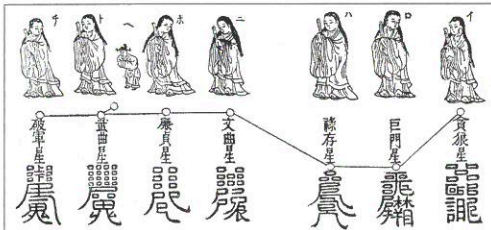
如意輪観音（その19）

仏教がインド発祥でありながら、異なる文化圏にも弘通して各地で根を下ろしたことは理由がある。その理由のひとつは、仏教が他宗教に対して排他的ではなく、異文化・異宗教と習合したことが挙げられよう。例えば日本では、仏教は日本古来の死者供養や先祖崇拜を取り入れ、儀礼や信仰の中で共存させていった。これに対し、キリスト教は仏教と同様の「戦略」を取らなかった。日本に伝来したカトリックは多くの場合、信者に「故人は神様ではないから崇拜してはならない」と教えてきた。筆者の寺坊でも、かつてカトリック信者だった方が、故人を神の如く尊

崇することを禁じられ、そこに違和感を覚えて仏教に改宗された例がある。仏教で「供養」と漢訳された語は、サンスクリット語でプージャー（puja）またはプージャー（puja）といい、元来は「尊敬・尊崇」を表した。英語で言えば「リスペクト respect」であり、「ワーシップ worship」である。その語義を考えれば、供養の対象は生者でも死者でもあり、さらには仏菩薩でもあり得る。供養の対象が変わるうと、供養者の気持ちに相違や優劣はない。一方、カトリシズム（カトリックの教え）においては、祈り（prayer）の対象は神のみであって、死者を思う気持ちは追悼（ユーロジー eulogy）として区別される。キリスト教が一神教とされる所以である。日本仏教の年回法要では、死者は神仏同様に供養の対象であるとともに追悼の対象でもある。そのことは、キリスト教徒がメモリアル・サービス（memorial service）として死者に対しては讃えたり偲んだりするのみであって、祈りは神に対してのみであるのと相違する。供養の思想と儀礼は、日本で仏教が広まり土着した要因の一つと考えてよい。蓋し、キリスト教徒が日本人の1%を越えない理由は、日本人の伝統的宗教や世界観との習合を進めなかったことにある。

前置きが長くなったが、前号で述べた仏教、ことに密教における北斗七星信仰も中国（シナ）の古来の信仰を受容し、教理・儀礼・造形を通じて仏教化して定着していったものである。北斗

七星の功徳を説いた『佛説北斗七星延命經』（『大正大藏經』卷二十一、No. 二二〇七、四二五b、四二六b）は、「（インドの）婆羅門の僧侶がこの經典を唐朝に齎したものを受け取り（大切に）持った（婆羅門僧將到此經唐朝受持）」と記しているが、漢文がオリジナルと考えられている。その後、「14世紀の前半、ウイグル語・モンゴル語・チベット語に翻訳され」（松川節「サンクトペテルブルク大学図書館所蔵モンゴル語写本大藏經の『佛説北斗七星延命經』訳注」『真宗総合研究所研究紀要』大谷大学真宗総合研究所、二〇〇二年、二二頁）で、汎アジア的に弘通した。モンゴルでは土着のシャマニズムにおける尊崇対象であった「七人の老人（Doluaia cügen）」と習合した。七人の老人とは北斗七星を指す。この神々にはモンゴル語で讃歌が作られ、シャマンによって呼



『大正大藏經』が原本とする奈良・長谷寺藏本（享和二年、一八〇二年）『佛説北斗七星延命經』所載の神格化した北斗七星とその護符

び寄せられて、狩猟の安全や正統的な指導者を得るためなどに祈りが捧げられた（W. Heissig, Die Religionen der Mongolei. Verlag W. Kohlhammer, 1970, S. 389 ff.）。漢文の『佛説北斗七星延命經』は、十二支の生まれ年に北斗七星の貪狼星・巨門星・禄存星・文曲星・廉貞星・武曲星・破軍星（前号では田代有樹女の論文に従い漢音でルビを振ったが、ここでは仏教式の呉音でルビを振る）を配し、人の吉凶を記している。さらに

北斗七星のいわば本地として、それぞれ東方最勝世界蓮意通證薬師如来佛、東方妙寶世界光音自在如来佛、東方圓満世界金色成就如来佛、東方無憂世界最勝吉祥如来佛、東方淨住世界廣達智辨如来佛、東方法意世界法界游戲如来佛、東方琉璃世界薬師琉璃光如来佛を説いている。本経によれば、人の生命（寿命）は比丘・比丘尼や宰官・居士、善男子・善女人、貴賤などの相違を問わず、すべて北斗七星の所管になることを知るべしという（原文「須知北斗七星管人生命」）。そのため、人々はそれらに供物を捧げて供養し、真言を誦することにより災禍や疾病を免れることができると説く。また、本経所説の七如来佛は薬師七佛であり、「薬師七仏」と天体の関係は非常に親密であり、また中国古来からの北斗七星を『長寿延命』の機能という共

通点で結ぶことが理解できる（蘇佳瑩「日本における熾盛光仏凶像の考察」『美術史論集』一巻、神戸大学美術史研究会、二〇一一年、一一六頁）とされる。その思想はまさに仏教と北斗七星信仰の習合である。この信仰は密教事相と結びつき、さらに仏教の文脈において展開している。真言伝持の八祖における第三祖の金剛智（六一七―七四一）が撰したと伝えられる『北斗七星念誦儀軌』（『大正大藏經』卷二二、No. 二二一〇）は、北斗七星などの供養法を示し、咒の功徳を説く。同じく第六祖である一行が撰したと伝えられる『北斗七星護摩法』（同、No. 一三〇五）は、二十八宿などの真言・印契を修して延命増算を求め、護摩の儀則を説いている。また、不空訳の『七星如意輪秘密要經』は、北斗七星と訶梨帝母を従えて如意輪観音を主尊とする世界を説き、

それを曼荼羅として図像化する儀軌も述べている。これにより、実際に七星如意輪曼荼羅が描かれたことは前号で述べた通りである（『観音菩薩の宗教』80）。北斗七星信仰と如意輪観音菩薩信仰は、真言僧や密教行者にとっても入門段階で意味を有するようになった。先に見た（『観音菩薩の宗教』89）四度加行における十八道を改めて見てみよう。そこには如意輪信仰と北斗七星などの星辰信仰との関わりを窺知できる修法が見出される。四度加行の最初に修する十八道は、その起源を空海が著したとされる『十八契印』に求められる（拙稿「観音菩薩の宗教」89）が、その中の「表白」や「神分」は後世の付加と指摘されている（八田幸雄「修験恵印流の儀軌と密教（2）」『供養法・護摩法』『密教研究』118号、一九七七年、一五頁、一八頁）。こ

のうち修験道が加行で用いる修験恵印流の「神分」には、「外金剛部金剛天を初め奉り、三界所有の天王天衆、大日国王城鎮守諸大明神、天照大神、八幡大菩薩等、六十余州の大小神祇、殊には大峰蔵王権現、地主金精大明神、神砂大王、子守、勝手、天之川神社等、満山諸神、別しては熊野三所、葛城護法等、本命元辰、諸宿曜等、焰摩法皇、太山部君、司命司録、冥官冥衆、当年行疫流行神等」（八田前掲論文、二二頁）として、曼荼羅の諸尊たる外金剛部金剛天や欲界の諸尊たる天王・天衆を初め、天照大神など日本古来の神々の名が挙げられている。高野山に伝わる法流のひとつである中院流の『四度加行次第』でも、「神分」には五類諸天や属星の文が挙げられる。五類諸天とは、上界天（色無色天）・虚空天（欲界の夜摩天以上の四

天）・地居天（四天王切利天）・地中天（龍・阿修羅・焰魔天）・遊虚空天（日月星辰）である（大栗道榮『よくわかる四度加行の教則』国書刊行会、一九九七年、一〇九―一〇頁）。属星の文とは、「当年所属の星を供養すること、本命星」では「人の生年は北斗七星の一つに当たり、その運命は自ら定まる」として、貪狼星（子）・巨門星（丑・亥）・禄存星（寅・戌）・文曲星（卯・酉）・廉貞星（辰・申）・武曲星（巳・未）・破軍星（午）とともに、元辰星（本命星の裏星）が挙げられる。それらを供養することにより、延命・官禄除病が成就するとされる（大栗、前掲書、一一〇―一一頁）。以上により、インド諸神、唐の北斗七星信仰、日本諸神の習合が見え、その経緯にはさらなる検証を要するが、如意輪信仰と北斗七星信仰の習合が見えてこよう。

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

57

十八世秀神15 高尾講結成の動向

当時の社会を構成するさまざまな身分・階層に属する人々が高尾山の護摩檀家となっていたことを、「江戸田舎日護摩講中元帳」（文化六年・一八〇九成立、以下「元帳」と略す）から明らかにした。この帳簿は大勢の檀家をひとまとめに「日護摩講」と表現しているが、一般的には寺社信仰の講と言え、地域の共同体レベルで信仰をとにもする集団を指す。この「元帳」には、いわゆる「高尾講」の実態について知る手がかりも含まれる。

代参講

「講」の語源は、寺院に人が集まり仏説を聞く平安時代の「講会」に由来するとされている。当初より宗教的色彩を帯びていたことになるが、互助金融である無尽講など信仰とはまた異なる趣旨の集まりにも使用される文字ではある。もともと、当時の庶民生活においては、生活共同体や同業者集団の結束を宗教が媒介するのは至極一般的であった。

人々には日々神仏を拝む習慣があり、村や町には菩提寺や鎮守社の他にも、所々に小祠・小堂から石仏・石祠まで、さまざまな神仏が祀られていた。共同での参拝やその後の直会（共同飲食）が生業をとにもする人々の絆を固くした。寺社参詣が流行を見せると、講という単位で参詣活動がおこなわれた。

参詣講の組織についての一般的なイメージは、リーダーである「講元」の下に会計や連絡などを担う数名の「世話人」があり、集落や町内ごとにその居住者おおよそ十数人から数十人が講員として加入するといわれるものである。定例的に講元の家などに集まり神仏の御影を描いた軸などを掲げて礼拝をおこない、俗人である講元・世話人とは別に宗教者としての性格を持つ先達と呼ばれる人々が儀礼を執り行うこともあった。遠方の寺社へは相当の旅費を要することから、全ての講員が参詣できるわけではなく、講金の積立てがなされ、クジ引きなどで選ばれた代表者を参詣に送り出す「代参」という形態がとられた。比較的近くの寺社の場合も、正・五・九月などに数度の参詣を毎年継続するため、代参の形態が取られることがあった。

高尾講の成立

葉王院文書の中には享保四年（二七一九）に富士講が登山・宿泊した記録が残るが、富士信仰と高尾信仰の密接性がこの頃から感じられる。高尾山に対する参詣講に関わる最も古い年次としては荏原郡馬込村（東京都大田区）の馬込元講の記念碑に「享保十六年二月二十四日 高尾山馬込元講 発起先達」と刻まれており、近い時期に作成されたと推定される「永代日護摩家名記」には、宝暦期（二七五―二六四）になると、「高麗郡岩沢村永代二十人講中」（埼玉県飯能市）、「野田村講中百十軒」（同入間市）、「榎木村二十五軒講」（同日高市）、「川越柏原村中九十二軒」（同狭山市）といった村名を冠した講の記載が現れる。一〇年余のスペインに数例でしかないが、永代の施主というやや特殊な事例でもあり、高尾山への群参が地元の旧家の日記にも度々記されていることか

らすると、この時期には地域を枠組とする高尾講が相当数形成されていたと考えるもよからう。江戸においても、寛政三年（二七九二）の湯島出開帳の記録には鎌倉河岸講中（東京都千代田区）、三河町一丁目講中（同）、肴町八日講（同新宿区）、湯島太々講（同文京区）、妻恋講中（同）などの名が見える。鎌倉河岸は元文三年（二七三八）の最初の江戸出開帳の世話人を務めているので、講の結成はその以前にさかのぼると考えられる。

さて、「元帳」の書き込みからは、村の共同体を単位とする代参講の実情が垣間見える。江戸芝金杉の綱屋清兵衛の取次先として上総国周准郡篠部村（千葉県富津市）の平野忠左衛門の名がある。忠左衛門には連記される白石伝次郎・吉次郎とともに「世話人」という肩書があり、「右は日護摩長札守四十四枚封

じ、平野忠左衛門名当にて書状在中にて綱屋まで届け置く。正月は代参登山故、代参の者へ御札守つかわし、五・九月は綱屋へつかわすなり。文化五辰年七月より始まり」と注記されている。すなわち、同村の高尾講は四四名で構成され、三

名の世話人の下、年三度の護摩供をおこなうが、正月は代参者を立て、五・九月は江戸在住者を介して配札を受けていたという点である。同様の営みが他にどれほど行われていたかは不明ながら、在村の高尾講の成員構成や活動の様相が具体的に

知れる事例である。

講の形成過程

秀神の代より時代は下るが、「元帳」には高尾講の形成過程という点で興味深い動向が読み取れる記事がある。

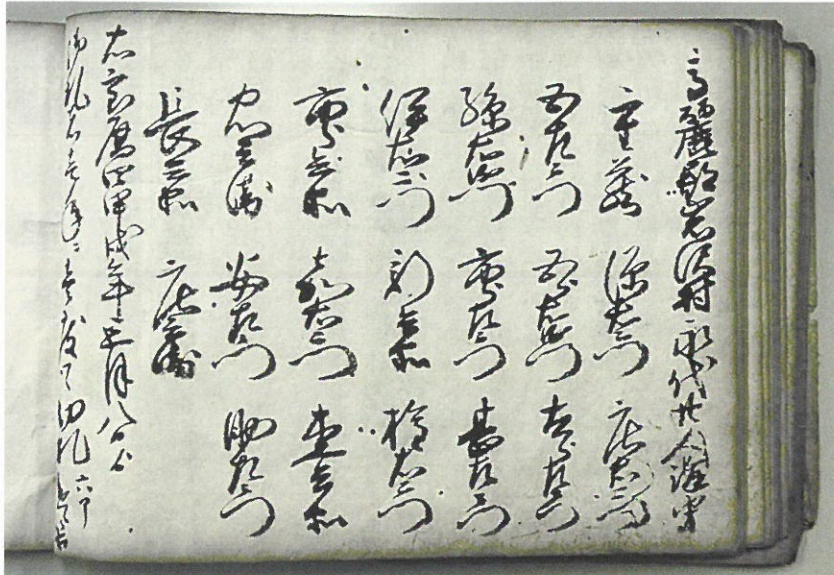
「元帳」は四〇年近く使用される内に加筆抹消が加えられ、貼り紙・挿し紙をもつて変更事項を付け加えてもいるが、その一枚に下散田村（八王子市散田町）の在住者を書き上げた紙片がある。「覚」とあり田野倉十兵衛以下二三名が名をつらね、「日護摩御初穂 子九月二十九日納」「代参太郎吉」と記載がある。二三名の代理として太郎吉が登山し護摩料を納めたという、一種の代参講の形態と理解される。別の一枚は子九月の覚とは石川太郎兵衛以下七名の人名が重複しており、「下散田村講中 天保五（二八三四）未正月改め」と明確に「講」を名乗り時期も明らかである。子年

と天保五年の前後関係だが、「元帳」本文にもある田野倉の名が重複する子年が先と判断できる。ここで注目されるのは、田野倉が「元帳」本文では「下段の施主」として八王子八木宿抹香屋磯五郎から取次を受け、一方、千人町丸屋伊兵衛から取次を受ける散田村の原善次郎、斎藤利兵衛、山崎周三郎、石川儀兵衛は子九月の覚にある人名と姓の一致を見る点である。原以下の名の違いが代替わりによるとすれば、子年は文化三年（二八一六）よりは遠く、姓名の一致がある天保五年に近い文政二年（二八二八）とひとまずは見当が付けられる。

同一村に在住しつつも従前は別の人物から取次を受けていた人々が、近い者同士で代参者を立てるようになり、さらに講を名乗るようになったというのが挿し紙の形態である。すなわち、当初は高尾山との間で護摩供

の施主という個別の関係を結んだ者たちが地縁的にまとまってゆく動向からは、高尾山信仰圏の拡張が護摩札取次を契機に点から面へと拡がる側面を持つていたことが理解できるのである。

葉王院文書の中には、幕末期の講の連名簿がいくつか存在する。本来は村の側に残る筈のものが、奉納か何かの理由で高尾山に残されたのだらう。世の中に高尾講が一体どのくらい組織されていたのか、その全体の数を知る術はないが、一八世紀半ば以降、八王子周辺との間の人や物資の往来が活性化する中、個人の信仰が周辺の人々を取り込み、高尾講が結成されてゆくような動向を思い描くことができよう。



「永代日護摩家名記」における武蔵国高麗郡岩沢村講中の記載（法政大学多摩図書館寄託）

暑さが続いておりますが、朝夕には少しづつ秋の気配が感じられるようになってきました。今回ご紹介する作品は、これまでご紹介してきた『生花』とは異なる『立花』という花形の作品です。

立花は仏前供花として始まった伝統的な花形です。今回は、様々な花材を取り合わせることで、作品に一つの世界観を作り出すことを目指しました。向かって右側には、ツルウメモドキの実や紅葉した夏ハゼを用いて、これから本格的に訪れる秋の雰囲気表現しています。一方で、左側にはシュロや青々とした緑の葉を配置し、まだ残る夏の暑さの中でも、爽やかな空気を感じていただ

いけばなの心 ⑤4

華道教授 佐藤 宗明

けるように工夫しました。このように、立花の作品では、異なる季節感を一つの空間に共存させることができます。



花材…ツルウメモドキ、シュロ、夏ハゼ、リアトリス、オクロレウカ、シーグレープ



れにより、季節の移ろいをも一つの作品の中で感じ取っていただけるのではないかと思います。今回の作品を通じて、立花の持つ独特の美しさと、季節感を楽しんでいただければ幸いです。

郵送御護摩申し込み受付について

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。遠方の御信徒や、参拝できない御信徒の皆様の為に、御護摩札の郵送をお受けしております。

手紙、FAX等での申し込みをお願いしておりますが、「高尾山薬王院公式ホームページ」内の御護摩祈禱の御案内からインターネットにて、直接お申し込み頂くことが出来ますので、是非ご利用頂きますようお願い申し上げます。

お問い合わせ先 ☎042-266-1115 「郵送御護摩係」まで

<p>西国四十九薬師霊場巡礼(6)</p> <p>秋遊正法寺</p> <p>東方浄琉璃浄土</p> <p>薬師琉璃子如来</p> <p>短跑春日稻荷現</p> <p>世俗利益山花開</p>	<p>厚木市 荒井 一雄</p> <p>秋風や 奇岩名石 動き出し</p> <p>秋、正法寺に遊ぶ</p> <p>東方浄琉璃浄土の教主は 薬師琉璃光如来様… 春日稻荷大権現様が 疾走なされば現世利益に 山花開く…</p>
---	--

御護摩修行のおすすめ

皆様の諸願成就を祈願する

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行をお勤めしております。御護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩惱を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様の祈りが御本尊に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、御供物と共に清浄な場所に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯繩大権現」とお唱え下さい。



御朱印のご案内

御朱印とは本来、心願成就を祈り書き写した経文(般若心経・観音経等)を、御本尊様の宝前にお納めし、その祈願を込めた印として頂いたものです。

現在は神社仏閣への参拝の証として、御朱印を頂く場合が多いようです。

高尾山は霊山として、又、多摩新四国第六十八番、関東三十六不動尊第八番の霊場の札所としてもその名を知られており、季節限定の御朱印など、様々な用意しております。

尚、御朱印は御本尊様の御分身に当る宝印であります。大切に護持頂きまして、益々御本尊様のご利益に浴せられますよう心よりお祈り申し上げます。

高尾山薬王院の御護摩札

<p>交通安全 (ステッカー) (車内用札)</p> <p>※お供物はつきません</p> <p>小) 巾5.5×長12.5cm</p> <p>大) 10,000円 中) 5,000円 小) 3,000円</p>	<p>御護摩</p> <p>小) 巾8.0×長35.5cm</p> <p>お護摩 3,000円以上</p>	<p>御護摩</p> <p>小) 巾8.5×長37.7cm</p> <p>お護摩 5,000円以上</p>	<p>御護摩</p> <p>小) 巾9.5×長42.3cm</p> <p>お護摩 10,000円以上</p>	<p>特別大護摩</p> <p>小) 巾12.0×長48.5cm</p> <p>特別大護摩 30,000円以上</p>	<p>開帳大護摩</p> <p>小) 巾12.0×長54.5cm</p> <p>開帳大護摩 50,000円以上</p>	<p>特別開帳大護摩</p> <p>小) 巾14.3×長60.5cm</p> <p>特別開帳大護摩 100,000円以上</p>
<p>(一) 内の略体をお書き下さい</p> <p>お護摩の願事</p> <p>お願い事は一体一願意とします。</p> <p>併願(二願意)は一万円より受け賜ります。</p> <p>但し、五千円で家内安全と商売繁昌のみ併願とさせていただきます。</p> <p>お護摩札には年令・生年月日等は入りません。</p>						
<p>家内安全(家)</p> <p>商業繁昌(商)</p> <p>事業繁栄(事)</p> <p>交通安全(車交)</p> <p>車内用札(車交)</p> <p>交通安全(不交)</p> <p>神棚用札(不交)</p> <p>身上安全(身)</p> <p>災難消除(災)</p> <p>厄除(厄)</p> <p>身体健全(体)</p> <p>当病平癒(病)</p> <p>開運(開)</p> <p>良縁成就(縁)</p> <p>安産成就(安)</p> <p>入学成就(入)</p> <p>心願成就(心)</p> <p>御札(札)</p> <p>奉納杉苗(杉)</p>						

第二百二十三回 信徒峰中修行会 十月十二日(土)〜十月十三日(日)

【信徒峰中修行会】を、十月十二日から十三日まで二日にかけて開催致します。高尾山に広がる大自然全体を道場として、御本尊・飯縄大権現様に身を任せ、一心に修行してみたいかがでしょうか。滝行や夜明け前に行われる回峰行、また法話や有喜苑での柴燈大護摩供等を実践致します。回峰行では、舗装されていない暗い山道を一定のペースで歩きますので、体力に自信のある方のみ御参加下さい。
※申込締切後、詳細を示した要綱をお送りします。



日程表
一日目
10:00 高尾山麓不動院 集合・受付
10:30 開会式
11:00 昼食
11:30 出立
12:00 滝行
14:00 回峰行
16:30 かしき谷にて法楽
17:00 坊入
17:30 入浴
18:30 夕食
20:00 就寝
二日目
2:45 起床
3:30 出立
3:40 神変堂法楽
3:45 回峰行
4:45 山頂法楽
5:30 朝勤行
6:00 朝作務
7:00 朝食
8:00 諸堂参拝
9:45 法話
10:45 昼食
11:45 柴燈大護摩
13:30 閉会式
高尾山麓不動院
14:00 解散

高尾山内八十八大師巡拝のご案内

多くの方が参拝できますよう左記のように二つのグループに分け、途中(山上十二丁目茶屋前第十七番札所)で合流し、一緒に巡拝いたします。
A、不動院から蛇滝を経由して薬王院まで歩く
B、ケーブルカーを利用する
(蛇滝周辺の御大師様は巡拝出来ません。また、ケーブル代金は自己負担になります。)

日程 十月八日(火)
行程 山麓不動院↓蛇滝↓仏舍利塔↓大本堂(護摩修行)↓坊入(昼食)↓一号路(下山)↓不動院(献灯式)↓解散
参加費 五千円(昼食代・保険料含む)
集合場所 山麓不動院(八時集合)
定員 四十名 ※定員に達し次第募集終了(当山ホームページにて告知)
申込方法 ハガキに郵便番号、住所、氏名、生年月日、性別、電話番号を明記の上、左記までお申込み下さい。または、ホームページ・QRコードからお申込み頂けます。その際には必要な事項をフォームに入力して下さい。

募集期間 九月二日(月)〜九月三十日(月)
〒一九二一八六八六
八王子市高尾町二七七
大本山高尾山薬王院 八十八大師係
※申込み後、順次行程表・詳細をお送り致します。



申込期間 九月二日(月)〜九月三十日(月)
参加費 二万五千円 *保険料含む
定員 四十人 *二十歳以上
集合 高尾山麓不動院
服装 運動着 運動靴(登山靴可)
持参品 ヘッドライト 弁当 (初日昼食分) 軽食 (二日目未明分) 雨具 (カッパ・ポンチョ) 洗面用具、タオル 寝間着、筆記用具 リュックサック
*お持ちの方は、念珠や錫杖をご持参下さい。

お申し込みについて

左記のいずれかの方法でお申し込み下さい。
①ハガキに必要事項(郵便番号・住所・氏名とふりがな・年齢・性別・生年月日・当日連絡のつく携帯電話番号・緊急連絡先(電話番号・名前・続柄)・アレルギーの有無)を明記してお送り下さい。
②QRコードからお申込み下さい。
●お車で越す際には山麓祈禱殿駐車場をご利用下さい。ご相談のある方は時間内(九時〜十六時迄)に信徒峰中修行会係までご連絡下さい。



七五三身上安全祈願

「七五三」とは、皆様方の可愛いお子様が、これから健康にすくすく育ちます様にと、身上安全の願いを込めて寺社にお参りするという行事です。高尾山でも御本尊・飯縄大権現様の御加護を願い、毎年多くのお子様がお参りに訪れております。十月〜十一月の間、山上「御護摩受付所」にて、「七五三祝い子育て祈禱」を受け付けております。どうぞ皆様で御来山なされますよう、ご案内申し上げます。
※十一月中の土・日・祝日には大変な混雑が予想されますので、時間に余裕を持って早めの御来山をお勧めしております。

いろは天狗の落し文(44)

三十六計逃げるに如かず」という言葉にもありますように、不利な状況に陥っている、またはそうなりつつある場合に、あれこれ打開しようとする場当たりに考えるより、逃げることも勇気と思い一旦仕切り直すことも大切なことです。ただし、逃げた後にしっかりと次の機会に挽回できるよりに立ち回ることが忘れてはいけません。

高尾山報助成金志納者
御芳名(順不同・敬称略)
小平市 関 道雄
秩父市 上原 幸江
茅ヶ崎市 岡本 イネ子
八王子市 吉田 喜平
高尾山健康登山者一同
東大和市 中川 彰久
昭島市 小町 高市
富里市 森 照森
比企郡 戸口 安宏
新座市 彰山 朋幸
八千代市 稲越 粧麗
八王子市 小池 まり子





登山だより

十月行事日程

一日～七日

聖天秘供(聖天堂)

八日、二十日

弁天秘供

四日

中興俊源大徳忌

七日、十五日

御詠歌勉強会

八日

仏舍利詣り(仏舍利塔)

高尾山内八十八大師巡拝

十二日～十三日

信徒峰中修行会

十七日

高尾山秋季大祭

二十一日

飯縄様御縁日

神徳報謝百味飲食供

(九時大本堂)

二十六日

月例写経会

(十三時山麓不動院)

二十七日

高尾山とんとんむかし

「語り部の会」

(十二時半山麓不動院)

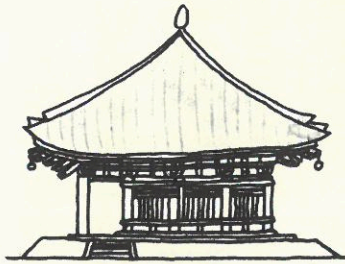
二十八日

奥の院開扉供養

(十時奥之院)

三十日

滝じまい



毎日の お護摩奉修時間

午前9時30分
" 11時00分

午後0時30分
" 2時00分
" 3時30分

ご講中・団体等
御相談下さい。

高尾山の昆虫

モノサシトンボ

179

イトトンボの仲間
モノサシトンボという
ユニークな和名を持つ
種がいます。

体長は四～五センチ
あり、イトトンボ型の
トンボとしては大型で、
何よりも特徴的なのは
腹部から尾にかけて物
差しの目盛りのように
規則正しい間隔の白い
環状紋があることで、正に生きた物差しの感が
あります。



多種のヤンマ類が生息することを含め、トンボ
の宝庫である高尾山においてもスマートでスタイ
リッシュな本種は存在感があります。

雌雄で色彩変異があり、オスは複眼の下部や
前胸、腹部、そして尾の先端が青白い色彩を帯び、
メスは緑がかります。水辺のやや暗い環境を好み、
水面に突き出た葉や茎等に翅を畳んで止まってい
る光景をよく目にします。

イトトンボの仲間独特の、ふわっとした飛び方
で力強さはありませんが、肉食性であることは他
のトンボと変わりません。やや華奢なイメージはあ
りますが、格調高さとメルヘンチックな雰囲気
を感じさせてくれる不思議なトンボだと思えます。

(文松島 孝 撮影 上村 雅昭)

高尾山報助成金

御志納のお願い

当山では、大護摩修行
等により御縁を結ばれた
御信徒様に高尾山報をご
送付しております。
引き続きご愛読して
頂けますよう、皆様方の
助成金御志納をお願い申
上げます。



高尾山薬王院ホームページ
<https://www.takaosan.or.jp>
下記のQRコード
から高尾山薬王院
のホームページに
アクセスできます



発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 犬山 秀康
編集人 菅井 倫浩
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円